

天声人語 1992年

2月9日

「あるシンポジウムで『厚生省は敵だ』と聴衆の1人から、いきなり言われた時はショックでした」。中澤健さんは、10年前、障害福祉専門官に着任した当時の思い出を、そう語る▼厚生省不信を真正直に受け止めた中澤さんは、現場を歩き、若手職員と夜を徹して語り合った。知恵遅れと呼ばれている人たちからも直接話を聴こうとした。施設暮らしの人は言いたいことを口に出さない習慣が身につについてしまっているのか、うつむくだけだった▼

町中の生活寮で暮らす人々を訪ねた時は、帰りがけに「今日は、私たちの話を聞いてくださって、ありがとうございます」と言われた。その「ありがとう」を何度も聞くうちに「いままでこの人々は、だれからも意見をきいてもらう機会がなかったのだ、と気がつきました」▼生の声をもとに、いろいろな制度を企画した。就職先でしくじった人を再訓練する場や施設を出て町で暮らすための練習の場を作った。世話人の助けを借りて、4、5人ずつが町で暮らすグループホームも考えた。3代の障害福祉課長が専門官の着想を政策に育てあげた▼

中澤さんは「障害を克服して」という表現が嫌いだ。どんなに障害が重くても、その人らしい持ち味を発揮するのが自立、そのためにさまざまに社会サービスを用意するのが行政の責任、という▼さきごろまとまった「福祉対策基礎調査」では、知的ハンディをもつ人々と相談を繰り返し、ふりがな付きの分かりやすい調査票を作った。長年調査に反対してきた人たちも、「厚生省を見直した」と言った。19年ぶりの調査は88%の高い回収率。調査票には行政への期待がめんめんと書きこまれていた▼その中澤さんが50歳を区切りに厚生省を去り、国際協力に身を投じることになった。退官の話が広がって以来、課長の元には「思いとどまらせて」という電話が殺到した。